学生が発信する金沢大学の地域貢献情報誌

2007 vol.5

地域とともに

「能登自然学校」設立記念特別対談
珠洲市長 泉谷満寿裕 × 金沢大学副学長 橋本 哲哉

里山里海自然学校06同行記
能登のNPOと手を結び さらに広がる体験活動の輪

特色ある法曹教育で差をつける
地域貢献にも結びつく 法科大学院の法律家育成

化石採集、化学実験、ディベートサロン…etc
「理科離れ」の子どもたちを呼び戻せ 無限の可能性を引き出す教育連携

骨密度が上昇し、心も穏やかに
草花がもたらす心身への好影響 鶴間キャンパス「園芸療法」最前線

白山現地ルポ
登山者の健康を守る 雲の上の診療所

「金沢大学タウン・ミーティングin羽咋」
地元の要望を聞き出し きずなを深めた2時間

「能登半島 里山里海自然学校」
奥能登の魅力を掘り起こす 地域活性化の強力ネットワーク

大学の「知」と地域の「活力」
連携から広がる無限の可能性
皆さんと一緒に、この街を、そして住む人を元気にしていきたい

地域とともに
金沢大学社会貢献室

——「能登半島　里山里海自然学校」——

奥能登の魅力を掘り起こす 地域活性化の強力ネットワーク

若年人口の流出に歯止めがかからない奥能登地域。高齢化社会の到来や第1次産業の不振もあって、地域文化の担い手は減る一方だ。このままでは、地方ならではの貴重な伝統習慣や自然が失われてしまうのも時間の問題だろう。文化を育む土台づくりが急務となっているなか、金沢大学は平成18年10月、珠洲市に研究交流の拠点となる「能登半島　里山里海自然学校」（以下、能登自然学校）を設立した。奥能登地域の厳しい現状を打破し、活性化を目的として“開校”した拠点を取材した。

学生編集委員　水越直哉

大学が各方面とスクラム 地域課題の解決策探る

能登自然学校は一つの学校や施設を指すのではなく、金沢大学や自治体、農林水産業関係者、ボランティアなど、能登で活躍する人々のネットワークの総称。さまざまな組織や個人が連携することで、身近な自然の保全と再生、環境に配慮した農林水産業の基盤振興策など地域課題とその解決策を提案していく。

三井物産環境基金から支援を受けており、金沢大学の自己資金と合わせて、3年間で総額約3200万円の事業を展開する。無償で借り受けた旧珠洲市立小泊小学校を活動拠点に、金沢大学から派遣された常駐の研究員が、調査研究活動や地域との交流活動の企画調整を行う。運営委員には、大学の研究者や里山駐村研究員（本誌第4号参照）、自治体職員ら27人が名を連ねている。

能登自然学校のホームページ（http://www.satoyama-satoumi.com/）
「めざすもの」と題して同自然学校の理念などが掲載されているほか、活動予定や報告なども随時更新されている

環境基金の支援を受けて 動き出したプロジェクト

能登自然学校の設立は珠洲市民にとっての悲願でもある。

平成16年10月、金沢大学は「タウン・ミーティング」を珠洲市で開催した。同ミーティングは地域住民の意見を直接聞き、ニーズを大学運営に生かすことを目的に、平成14年度から石川県内各地で開催している。このとき、珠洲市民からは「もっと能登を研究して、地域の活性化に貢献してほしい」「大学のサテライトを能登に作れないか」などの熱心な要望が相次いだが、当時はすぐに要望に応えられるほどの活動には至らなかった。以前から調査実習や研究室レベルでの調査研究活動は行われていたものの、大きな広がりを見せなかったのである。活動するために必要な資金も十分に捻出できず、懸案となっていた。

ところが、1年半後の平成18年3月に話は急展開する。その少し前に開催された能登町のタウン・ミーティングに参加していた三井物産の社員が金沢大学を訪れ、青少年の自然体験活動や里山保全、調査研究を進めている「角間の里山自然学校」を奥能登で展開してはどうかと持ちかけてきたのだ。同社では、そのような活動を支援できる環境基金を平成17年に設立したのだという。早速プログラムを立てて申請したところ、平成18年7月に支援決定の通知を受けることができた。

金沢大学から「研究交流の拠点を作りたい」との相談を受けた珠洲市は、拠点となる候補施設の選定に着手。自然計測応用研究センターの中村浩二教授ら大学関係者も視察に向かい、複数の候補施設のなかから、平成16年4月に創立130年の歴史に幕を閉じた旧小泊小学校校舎を選んだ。8月8日には、中村教授を委員長として設立委員会を発足。事業の推進体制や活動計画について議論を重ね、10月の〝スピード開校〟にこぎつけたのである。

地域貢献を大学憲章の核の一つと位置づける金沢大学と、原発建設計画の中止で新たな地域振興策を模索していた珠洲市がスクラムを組み、新たな取り組みが始まった。

「自然」を核に4つの柱で 奥能登の元気を引き出す

では、これからどのようにして地域活性化を目指していくのか。能登自然学校の活動には4つの柱がある。

まずは奥能登地域の自然環境の〝健康度〟を示す「ポテンシャル・マップ」の作成だ。里山駐村研究員を核とした地域住民と石川県立大学など他の高等教育機関と連携し、奥能登の自然環境を調査、分析。学問的なデータとして使える資料を作成する。例えば、カエルや魚などの水生生物や水草など田んぼに生息する動植物の数を調べて、その田んぼの健康度を調査したり、里山ではキノコや昆虫の多様性を調査したりする。この現地調査を踏まえて、奥能登の潜在力や可能性を引き出す「処方箋」をつくり、地域活性化につながる諸活動を推進していく。

2点目は、奥能登の地域活性化を担うリーダーの育成だ。若手の農林水産業従事者や自然を生かしたベンチャー事業を試みる若者を、奥能登の次世代を担うリーダーとして育成していく。そのためにも、環境配慮型の農林水産業を実践する人材の養成プログラムを開発し、実施する計画だ。プログラムの修了者が能登地域に定住し、事業に従事できるよう、地元自治体が住居を紹介するなど修了者を支援する体制も整える。

里山をはじめ自然環境の保全活動も展開する。過疎と高齢化が急速に進む奥能登では、これまで人の手によって維持、管理されてき

サンショウウオの生息状況を調査する市民ら

た里山などが放棄され、荒廃しつつある。里山の荒廃は、生物の多様性や自然環境の変化にも影響を及ぼすことから、早急な対応が求められる課題の一つでもある。里山保全活動を企画、実施するには、地元住民の協力が欠かせないが、県外や大都市圏からボランティアを募集し、一緒に保全活動を進めていく計画もある。この保全活動が根づいていけば、交流人口の拡大も期待できる。その他にも、かつてマツタケがとれた松林に再びマツタケが戻るよう整備したり、放棄された田んぼを利用して動植物や昆虫が生息できる環境（ビオトープ）を作ったりする計画などもある。

そして、「自然学校」の名前が示すように、地域住民や子どもたちを対象にした自然体験活動も企画、実施する。これには、金沢大学が社会貢献事業の一環で推進する「角間の里山自然学校」の活動実績と経験が生きてくる。「角間の里山自然学校」は、平成11年に設立され、角間キャンパスを中心に、里山の調査研究と学生教育をはじめ、青少年の自然体験などの交流活動や里山の保全活動などを続けている。地域ボランティアの「里山メイト」も600人を超え、活動の輪も少しずつ広がってきた。これまで培った実績と経験が、その範囲をさらに広げ、充実した活動となっていくのだ。

能登自然学校の社会的役割や組織図などをまとめたリーフレット。学校や団体など関連施設に設置されている

研究員が自然学校に常駐 住民の身近な相談相手に

能登自然学校には初年度、金沢大学の赤石大輔研究員が常駐する。昨年3月に博士号を取得したキノコを専門とする理学博士で、奥能登の山々を回り生態学の調査研究を進める一方、能登自然学校の活動の調整役も受け持つ。研究活動を続けながら、学校運営の一翼を担うのは大変なことだが、「自然体験活動の企画・運営のほか、子どもたちへの環境教育、地域の方々と連携した調査研究活動にも取り組んでいきたい」と意欲的だ。地元住民にとっても、気軽に相談できる研究者が身近にいることは心強い。

大学にとって、任期付きながら研究員を常駐させる決断をしたことは重く、大きい。奥能登の環境保全、調査研究の推進、地域の活性化を目指す能登自然学校への強い意気込みの表れだ。

能登自然学校は、強力な人材ネットワークと大学の教育研究力を結集させ、過疎や地域振興など奥能登地域が抱える諸課題の解決策を提言していこうとしている。活動の成果は、同じ課題を抱える地方への提言ともなるだろう。

活動計画や抱負を語る赤石さん（右）

能登自然学校、第1回運営委員会を開催

秋晴れとなった平成18年10月9日。看板の除幕式が行われたばかりの能登自然学校の拠点で、第1回の運営委員会が開催された。里山駐村研究員や大学教員など多彩なメンバーが名を連ねる運営委員やアドバイザーら23人が集まり、運営委員会の役割や活動の基本方針、計画などを話し合った。

設立直後、初めての会合とあって少し緊張した雰囲気が漂うなか、運営委員長の中村浩二教授があいさつ。各委員の自己紹介と能登自然学校の基本的な活動方針などの説明の後、ざっくばらんな意見交換が行われた。各分野で地域の中心となって活躍するメンバーが集まったとあって、能登自然学校への思い、期待は強く、アイデアも豊富だ。例えば、「食」をキーワードにした活動の提案があった。能登の食材を使った郷土料理を集め、100のレシピにまとめて、情報発信をしていこうというのだ。

「多くの学生が参加できるような活動のネットワークができれば」と、学生の調査実習の活動拠点とすることで、地域と学生との交流の促進に期待を寄せる声もあった。学生が地域に直接ふれることで、地域の現状や課題について考える機会になる。課題を分析し、解決策を提案することで課題探求能力の育成につながるなど教育効果は計り知れない。学生への教育効果のみならず、若者の斬新な発想や提案で、地域の活性化することも期待できる。そのほかにも、さまざまな意見、提案があり、充実した意見交換が続いた。

泉谷満寿裕（珠洲市長）×橋本哲哉（金沢大学副学長）

平成18年10月9日、奥能登地域の環境調査や研究、地域交流の拠点として能登自然学校が設立された。除幕式を終えた直後、金沢大学との連携に期待を寄せる泉谷満寿裕珠洲市長をお迎えし、橋本哲哉副学長と対談していただいた。奥能登地域への想いや地域課題、連携事業の展望、将来の夢など話が弾んだ。

学生編集委員　神谷卓史

橋本 2年前のタウンミーティングで珠洲市に伺ったときとは、ずいぶん変わった印象を持ちました。若い市長さんになられたからか、フレッシュな感じがします。泉谷さんは、本学との個人的なご縁はありますか？

泉谷 昨年、開講された「地域経済塾奥能登教室」を受講しました。金沢大学は「堅い」というイメージがありましたが、積極的に地域と関わろうとしていることがわかりました。

橋本 私の思い出は、大学に入ってすぐの1959年ごろだと思いますが、友達6、7人とキャンプをしながら狼煙（のろし）まで来たのを憶えています。ところで、以前、のと鉄道をもう一度走らせる計画があると聞きましたが、その後はいかがですか？

泉谷 NPOの方が中心となって計画しています。しかし、予算立てや資金集めなど具体的な動きには至っていません。夢を描くことはできますが、それを実現していく人材が不足しているのが、本市の課題です。これから人材養成にも取り組まなければなりませんが、金沢大学にも力を貸していただけたらと思っています。

橋本 もちろん人材養成の面でも力になりたいですし、NPOとの連携やその人材養成のノウハウを蓄えていくことも大学の役割ではないかと思っています。

本学では、「教育」と「研究」に加え「社会貢献」を第3の使命として事業を推進していますが、その社会貢献事業の柱の一つが「角間の里山自然学校」です。今回、設立した能登自然学校は、我々の思いが叶った事業です。

泉谷 私にとっても学術的な拠点の設立は夢でした。珠洲市、奥能登はもともと地理的なハンディがあるうえに、学術的なハンディも背負っています。高校を卒業すると、進学のために地元を離れる方が多いんです。また、市民は意欲を持っているけれど、それを実現させる学術的な拠点がなかった。それが、まさか市長になって数カ月で夢が実現するとは思っていませんでした。小泊（地区）に説明に行ったときも、住民は「可能性が出てきましたね！」「光がさした！」と喜んでいました。

橋本 泉谷さんは今年6月に市長に就任されましたが、何か心境の変化はありますか？

泉谷 珠洲がかわいくてしょうがなくなりました。祭も伝統文化も自然も食も……いろんなものが日本一だと。「ここの市長になれて幸せやな」と思っています。

しかし、その魅力に気づいていない方が多い。市民が地元の魅力をわかって誇りを持つと、地域の活性化に繋がるんですが、珠洲の魅力を誰が教えてくれるかと言うと、実は市外から来られた方なんです。地元の魅力というのは、他地域の人から「いいとこやね」と言われて初めて気づくものです。そういう意味でも交流人口の拡大を図っていきたいと思っています。

橋本 これから学生たちをどんどん能登に送り込みたいと思っています。街の賑わいのためには、若者が重要な

市民と学生、研究者がふれあい珠洲に活気を

泉谷満寿裕（いずみや・ますひろ）
昭和39年、珠洲市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。野村證券勤務を経て、平成15年、家業で老舗和菓子店の泉谷菓子舗代表に。NPO法人の理事長を務めるなどまちづくりにも積極的に取り組む。平成18年6月、珠洲市長選で初当選した。

橋本哲哉（はしもと・てつや）
金沢大学理事、副学長、社会貢献室長。文学博士。昭和16年、東京都生まれ。東京教育大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。昭和46年金沢大学法文学部講師、経済学部教授、経済学部長、附属図書館長を経て、平成16年より現職。専門は経済史。

長期の活動で地元の人々から信頼を得たい

地域とともに
CONTENTS

2007 vol.5

特集 3 「能登半島 里山里海自然学校」
奥能登の魅力を掘り起こす
地域活性化の強力ネットワーク

記念対談 6 「能登自然学校」設立記念特別対談
珠洲市長 泉谷満寿裕 × 金沢大学副学長 橋本哲哉

自然・文化 8 里山里海自然学校'06同行記
能登のNPOと手を結び
さらに広がる体験活動の輪

地域課題 10 特色ある法曹教育で差をつける
地域貢献にも結びつく
法科大学院の法律家育成

人材養成 12 化石採集、化学実験、ディベートサロン…etc
「理科離れ」の子どもたちを呼び戻せ
無限の可能性を引き出す教育連携

医療・保健・福祉 14 骨密度が上昇し、心も穏やかに
草花がもたらす心身への好影響
鶴間キャンパス「園芸療法」最前線

医療・保健・福祉 16 白山現地ルポ
登山者の健康を守る
雲の上の診療所

Topics 18 「金沢大学タウン・ミーティングin羽咋」
地元の要望を聞き出し
きずなを深めた2時間

編集委員紹介

「能登自然学校」設立記念特別対談

役割を果たすと思います。ここ(学校)を研究や自然学校的な活動だけでなく、例えば学生がゼミ合宿をするなど、教育の拠点としても活用したい。

また、学校に常駐することになった赤石君のような、博士号を取った若い有能な人材が本学にはたくさんいます。彼らにも自然学校のような準研究機関をステップに、研究者として飛躍してほしいと思っています。その意味で、若手研究者も途切れることなく送り込みたいと思っています。

泉谷 市民と研究者や学生の交流が生まれれば嬉しく思います。この学校が学術的な拠点としてだけでなく、人材育成やNPOのお世話もする拠点にまで発展してくれたらいいですね。さらには「環境学部」のキャンパスが設立されるまでに発展すればいいなと期待しています。(笑)

橋本 新学部設立は大変な難問ですが、今回、支援をいただいている三井物産のような会社が10社ほど集まれば、その可能性は高まるのではないかと思います。医学部では、寄付講座などスポンサーのついた講座があるので、いわゆる冠学部のような形で夢が現実になるかもしれません。それを考えると、この学校の研究的な成果も重要ですね。そのためにも、長期的に足場を置いて地域の方に信用される活動をしたいと思っています。

泉谷 私も継続的な活動になるように、地元の体制を整えていきたいと考えています。

橋本 今後ともよろしくお願いします。本日はありがとうございました。

里山里海自然学校'06同行記

能登のNPOと手を結びさらに広がる体験活動の輪

夏休みも終わりに近づいた8月下旬、輪島市門前町深見の海岸で、元気に磯を走り回り、海に飛び込む子どもたちの姿があった。「タコがいるよ！こっちこっち！」「いっせーのーで、ジャーンプ！」。金沢大学とNPO法人などが初めて開催した自然体験教室。いきいきとした子どもたちの姿を追うとともに、活動を通して浮かび上がる課題を報告する。

社会貢献室研究員　中村 晃規

掃除、洗濯や食事の準備も子どもたちが分担した

8月23日から25日までの3日間にわたって開催されたのは、「里山里海自然学校2006夏 能登教室」。小学2年生から6年生までの30人が合宿形式で参加し、夏の思い出づくりに励んだ。

参加者のうち29人は金沢市内の小学生で、里山では昆虫採集やアリの調査、夜には鳴く虫の観察や星空観察、海では磯の生き物観察や自作の竿で魚釣り、海水からの塩づくりなど盛りだくさんのプログラムを楽しんだ。3日間とも好天に恵まれ、子どもたちは豊かな能登の自然にどっぷり浸かり、充実した表情を見せていた。

タウンミーティングでNPOが支援を求める

自然体験教室は、金沢大学「角間の里山自然学校」と能登地域の活性化に取り組むNPO法人「能登ネットワーク」、そして金沢子ども科学財団が手を結んだ初めての事業だ。

「金沢の子どもたちに能登の自然を知ってもらいたい。我々は能登の自然を体験するプログラムとフィールドを準備できます」。平成18年3月に開催した能登町でのタウンミーティングで、能登ネットワーク事務局長の岡本紀雄さんが金沢大学に協力を求めた。大学には角間の里山自然学校の活動実績と、そこから生まれた強いネットワークがある。

企画の骨子はすぐに固まった。能登ネットワークと里山自然学校が具体的な計画を立て、金沢子ども科学財団に参加者募集の協力を求めた。子ども科学財団と里山自然学校は、角間キャンパスでの自然体験学習を毎年共催するなど協力関係がすでに確立している。

大学では大学院生から講師も募り、ボランティアサークルに学生の派遣を依頼した。こうして3者が共催する初の自然体験教室が生まれた。

貴重な体験重ねた金沢の子どもたち

輪島市の山中にある合宿所は深い闇に包まれた。街灯もない、光が漏れる建物もない、完全な闇。まぶたを閉じたときとほとんど変わらない暗闇のなかで、星空観察会が開かれた。

子どもたちは芝生の広場にひいたゴザやビニルシートに仰向けに寝転がり、一斉に懐中電灯の光を消した。「うわぁ」。誰からともなく、ため息のような声が漏れる。目の前に広がる一面の星。金沢で

子どもたちは能登の大自然を満喫した

は街の明かりにかき消されるかすかな光も、1個の星としてしっかりとした輝きを放ち、空一面を埋め尽くしていた。

これほどの数の星を見たのは生まれて初めてという子どもがほとんどだったろう。「あちらに白く帯みたいに見えるのは何ですか。雲、それとも霧？」と子どもが指さす先を見てスタッフが答える。「天の川や。金沢ではなかなかここまで見えんやろ」。「うそぉ、すげぇ！」。ポカンと口を開け、天の川を見つめる子どもたち。空を照らす光がないため、はっきり見えるその姿を星の集まりとは思えなかったのだろう。

星空観察会。夜空には無数の星が輝いていた

手作りの竿で釣果を競う 体験活動の醍醐味を満喫

「さあ、出発するぞー！」。ノコギリを持ったスタッフの後ろに列を作り、子どもたちが歩く。目指すは合宿所近くにある「メダケ」の林。翌日の魚釣りに備え、釣り竿になる竹を取りに行くのだ。お目当ての場所に着くと、スタッフが次々にメダケを切って渡していく。渡されたメダケを吟味する子どもの目は真剣で、まるで「魚が釣れるかどうかは、この竿選びにかかっている」と言わんばかりだ。

一夜明けて魚釣りの本番。海に向かって30本の手作り釣り竿がずらりと並んだ。「エサはこれだよ」とスタッフが見せたのはこのあたりで「シタダメ」と呼ばれる小さな巻き貝。ちょっと周りを探せば、磯の岩にたくさんくっついている。「これを石でグシャっとつぶして、中身を針につければ、できあがり！」。「そんなので本当に釣れるの？」と半信半疑の子どもが聞いた。「それは君らの腕次第」、「ふーん。まあ、頑張ってみるわ」。

釣り竿を自作する子どもたち

約30分後、「うわぁ、釣れた釣れた！」とうれしそうな声があちこちから聞こえてきた。釣れた子どもたちは満面の笑み。釣果が上がらない子どもたちは、大きいエサに取り替えたり、エサをいくつもつけたり、いろんな貝を使ったりと試行錯誤を繰り返している。スタッフが釣れない子どもたちに言う。「みんなが釣れたら面白くない。釣れたり、釣れなかったりするのが面白いんや」。それこそが子どもを熱中させる仕掛けであり、自然体験の醍醐味なのだ。子どもたちは真っ赤に焼けた顔を海面に向けながら、魚釣りを満喫していた。

磯に並んで魚釣り。垂れた釣り糸を見る目は真剣

若手指導者育成へ向け 養成講座の開講計画も

3日間の活動も終わり、いよいよ解散の日。合宿の感想を尋ねると、全員が口をそろえて「楽しかった」「また能登に来たい！」と目を輝かせた。子どもたちは自然体験合宿を通して、思い出を胸に刻み、目には見えない「夏休みの宝物」を持ち帰ったようだ。

この様子はテレビでも紹介された。番組を見た子どもの保護者からは、「子どもたちがうれしそうにチャレンジしているのを見て、これが子どもの本来あるべき姿だと感じました。ウチの子もすごく楽しかったみたいで、目を輝かせていっぱい思い出話をしてくれました。ここで経験したことは、この子たちにとって一生の宝物になると思います」と感謝のメールも届いた。そのほかにも、保護者からの声が続々と寄せられ、能登半島での自然体験教室は大きな反響を呼んだ。

活動には課題もある。自然体験活動の指導者、特に講師をサポートする人材が不足しているのだ。角間の里山自然学校の活動では指導者1人に対し、参加者が30人を超えることも珍しくない。そのため、細かい部分にまで目が行き届かず、十分な指導ができないことも多い。

この問題を解決するため、角間の里山自然学校と能登半島里山里海自然学校（本誌3ページ参照）では、県内の大学生、短大生を対象にした「里山里海リーダー養成講座（仮称）」の開講を計画している。計画では、集まった学生が4日間、CONE（コーン：NPO法人「自然体験活動推進協議会」）のリーダー養成カリキュラムに沿った講義、実技を受講する。約250団体が参加するCONEは、指導者が活躍できる仕組みづくりを柱に、自然体験活動の普及に取り組んでいるNPOだ。

CONEのカリキュラムで自然体験活動指導者としての基礎を学んだ学生は、両自然学校から「里山里海リーダー」に認定されると同時に、CONEの「自然体験リーダー」の資格も得ることになる。修了後は両自然学校のほか、県内団体の事業情報を里山里海リーダーに提供して参加協力を促し、さらに実際の現場で経験を積む。このようにして、県内の自然体験活動を支える一翼となる人材を育成していこうというのだ。

図鑑の使い方も教わった

若いリーダーが増えていけば、ニーズが高い能登地区での自然体験活動はさらに充実する。若手の人材不足は、自然体験活動に取り組む多くの団体が抱える慢性的な悩みではあるが、若手人材の発掘と育成をこまめに続けていけば、県内の自然体験活動全体の底上げにもつながっていくだろう。子どもたちの笑顔を増やすためにも、たゆまぬ努力が欠かせない。

特色ある法曹教育で差をつける

地域貢献にも結びつく法科大学院の法律家育成

金沢大学を含む全国各地の大学に「法科大学院」が誕生し、裁判官や検事、弁護士といった「法曹人口」を増やす動きが顕著になってきている。しかし、どの大学でも同じ教育が受けられるのなら、地方の法科大学院の存在意義が薄れてしまうはずだ。金沢大学法科大学院ならではの取り組みを探ってみた。

学生編集委員　牧内幸子

模擬裁判。事前の筋書きがないため会場にも緊張感が漂う

複雑化する法律問題 法曹人口の拡大が急務

社会が複雑になるにつれ、そこから起きるトラブルも多様化し、より高度な司法判断や法解釈が求められる機会が増えている。民事の法律相談に限ってみても、以前は相続や不動産所有権の問題が主だったが、近年ではインターネットや株取引に関するトラブルといったような幅広い相談が寄せられるようになった。法曹の質を維持しつつ法曹人口を拡大するためにも、多様化する法律問題に柔軟に対応できる法曹を育てることが急務となっている。

平成16年4月、全国の大学に「法科大学院」が設立された。弁護士が少ない能登や富山東部を抱える北陸では、特に法科大学院への期待が高い。北陸3県の弁護士会の支援も受ける金沢大学法科大学院は、「地域に根ざした法曹教育」を基本理念とし、質の高い法曹を世に送り出そうとしている。なかでも、基本理念を実践するための重要な事業に位置づけられているのが、「法情報センター北陸」だ。

教育と地域貢献の核「法情報センター北陸」

文部科学省から特色ある優れたプロジェクトとして認定されている「法情報センター北陸」は、法科大学院の主要事業の一つ。学生に対する法曹教育だけにとどまらず、「市民への情報提供」という役割も担っている。

市民向けには、模擬裁判の実施や高齢者の財産を守るための成年後見制度、国民に利用しやすく分かりやすい民事裁判や人事裁判の講座などを開催しているほか、「金沢大学サテライト・プラザ」（金沢市西町）の一角に「法情報センター北陸・金沢サテライト」を開設。パソコンから法律に関する情報を検索できるスペースを設置し、無料開放している。

このように地域へ情報を発信すれば、市民からの意見や反応が得られ、それらを法科大学院の教育にフィードバックすることもできる。つまり「地域貢献」と「教育」が一体となることで、「地域に根ざした法曹教育」が可能となり、法科大学院の形成を支援しているのだ。

1月の休日の午後、金沢サテライトに足を運んでみた。書架には関連書籍が備えられ、自由に閲覧できるようになっている。この日も行政書士などの資格を目指す人や、法律科目を受講している放送

無料で利用できる法情報センター北陸・金沢サテライト

大学の学生がパソコンに向かっていた。

パソコン検索を利用する際は、学生が分かりやすく丁寧に説明してくれる。法情報の検索を通じて学生と地域の人々が直接ふれあう光景に、「地域貢献のあるべき姿」を見た気がした。

このように、法情報センター北陸は地域貢献を意識した事業ではあるが、根本の「法曹教育の充実」を忘れてはならない。次に、教育プログラムとして実施している「模擬裁判」と「リーガルクリニック」をそれぞれのぞいてみた。

パソコンで判例や法律雑誌などの情報を検索できる

より実践的な教育で一般の人々にも恩恵

昨年9月上旬。サテライト・プラザでは本番の裁判さながらの白熱したやり取りが行われた。金沢大学法科大学院の実践的な授業の一つ、「模擬裁判」だ。

学生が裁判官、検察官、弁護士、被告人、そして裁判員らに扮し、現役の裁判官や弁護士と一緒に事件を裁く。模擬とはいえ、学生に事前に与えられるのは事件の概要だけで、筋書きはない。学生たちにとっては、実際の裁判に近い環境で実務を学べるのだ。

この模擬裁判は、一般の人に裁判や「裁判員制度」を身近に感じてもらうことも目的としている。裁判員制度とは、国民から無作為に選ばれた裁判員が、殺人、傷害致死などの重大事件を裁判官と一緒に審理する制度で、平成21年5月までに導入される。国民の司法参加が大きく進むと期待される一方で、まだ十分な理解がされていないという問題も抱えている。模擬裁判は、そんな裁判員制度に対して市民が抱える疑問や不安を解消し、より深い理解を促す試みでもあるのだ。実際に参加した市民に聞くと、「裁判の雰囲気を実感できた」「裁判員制度についての理解が深まった」との声が上がった。

リーガルクリニックは弁護士の指導のもと、学生が依頼者に相対し、相談業務を行う実務教育だ。

弁護士として法科大学院の教壇に立つ野坂佳生教授は、「法曹の資質というものは、座学もさることながら実務で養われる点が大きい」と話す。弁護士といえども、依頼人とのコミュニケーションのとり方や信頼関係の構築は難しい。「依頼人との連絡や確認が不十分だと信頼されない」と野坂教授は続けた。リーガルクリニックは、学生がコミュニケーション方法を習得する機会にもなっている。

サテライト・プラザでは毎月2回リーガルクリニックが開かれ、各回4件の相談を受け付けている。

法律関係の参考図書も豊富に揃う

持ち込まれる相談内容は、離婚や遺産分割、そして不動産に関する日常的な問題から株の所有権トラブルまで多岐にわたり、学生の助言内容については、地元弁護士会の指導弁護士が責任を持って対応している。無料相談とはいえ本格的で、守秘義務も遵守されるので、安心して相談することができる。

今年度の相談希望件数が多かったことから、野坂教授は来年度の回数や件数を増やすことも検討している。

地域事情に精通した法律家を生み出す

法曹界を目指すなら、司法試験に合格することが前提となる。「法律は全国どこでも同じで司法試験も一緒。だから、どこで法曹教育を受けようが関係ない」と考える人がいるかもしれない。しかし、金沢大学が「地域に根ざした法曹教育」を基本理念としているように、全国の法科大学院もそれぞれに基本理念を掲げ、様々な教育方法で法曹の質を高めようとしている。

模擬裁判やリーガルクリニックなど、法情報センター北陸を核とした金沢大学法科大学院の取り組みを取材すると、教育の充実と並行して地域に根づこうとする姿が見て取れる。

地域の人々に法情報を提供し、その意見を教育に反映させる法科大学院。そこから生まれる「法の専門家」は、同時に「地域の専門家」にもなっているだろう。法律相談を持ちかける側の立場で考えると、「地域の事情に精通した法律家」ほど心強い味方はいない。

学びと情報の発信拠点

金沢大学サテライト・プラザ

◆大学インフォメーションセンター
◆法律関係図書・判例等の閲覧、法情報検索コーナー
（法情報センター北陸・金沢サテライト）
◆公開講座やミニ講演など各種講座の開催

〒920-0913　金沢市西町3番丁16番地
TEL:076-232-5343　FAX:076-232-5383
E-mail:satellite@spacelan.ne.jp
http://www.ad.kanazawa-u.ac.jp/ad_koho/satellite/

化石採集、化学実験、ディベートサロン…etc

「理科離れ」の子どもたちを呼び戻せ 無限の可能性を引き出す教育連携

「子どもの理科離れが進んでいる」といわれて久しい。言葉だけが一人歩きしている可能性も否定できず、本当のところ、今の子どもたちがどう感じているのかはわからない。しかし、教育する側も「理科離れ」の現状をただ放置しているわけではない。ある財団と金沢大学の取り組みを追うと、理科教育の新たな可能性が見えてきた。

学生編集委員　明石晃知

採集した化石の土を落とす子どもたち。化石を傷つけないよう作業する姿は真剣そのもの

150万年前の化石に小学生も大興奮

昨年10月初旬、富山県の静かな山間地で、化石採集の課外授業が行われた。少し冷たい雨が降る悪天候にも関わらず、小学校高学年の児童約40人が、長靴やかっぱを身につけ、集まった。採集地へ向かうバスの車内は騒がしく、子どもたちは興奮を隠しきれない様子だ。現地に到着すると、小さな手に不釣合いなハンマーを持ち、おぼつかない手つきで採集活動を始めた。活動中も笑顔は絶えない。

「先生、この化石は何ですか」「それは、約150万年前のウニの化石でホクヨウハスノハカシパンという名前なんだ」。化石採集の引率、指導にあたったのは、理学部の神谷隆宏教授。専門的な知識やノウハウをもとに、次から次へと飛ぶ子どもたちの質問に答え、作業の手ほどきをする。指導に従って子どもたちは自分で化石を採集し、土を落とし、名称を書き込んだ袋に詰める。その袋を手に「テレビゲームの10万倍楽しい」という子どもたちの姿からは、頻繁にいわれる「理科離れ」は全く感じられない。

子ども科学財団と連携 充実していく理科教育

この化石採集は、「金沢子ども科学財団」と金沢大学の連携事業の一つである。金沢市西町の教育研修館の一角に拠点を置く同財団は、平成12年12月、子どもたちが自然観察や科学実験を体験し、楽しみながら学び、アイデアや発想を育んでいく環境をつくることを目的に設立された。設立時には、よりレベルの高い理科教育を実施するために、専門的な知識を持つ小・中・高校、大学や民間、ボランティアらと連携していくというビジョンのもとに事業が進められた。その結果、多くの場面で財団と金沢大学の連携も実現した。「おもしろ実験・観察教室」では化石採集以外に「電波実験」や「液体窒素実験」など興味深い体験教室が揃う。そのほかにも、自由研究や科学に関する疑問を子どもたちと大学生が一緒に考える「なぜなぜディベート・サロン」、自然のなかで遊びながら、海や里山の成り立ちや動植物の調べ方を学ぶ「自然学校」など多様な連携事業が展開されている。

「財団が財を提供し、金沢大学が知を提供する。それによって、総合的かつ専門的な理科教育が可能になり、素晴らしい人材を育成できる」と同財団啓発ディレクターの戸田教一さんは語る。何かをやってみたいと思う子どもに、財団が機会を与え、具体的な方法論を大学が与えていくことで、理科教育を充実させていくのが狙いだ。

一方で、金沢大学は財団を設立当初から支援しており、理学部に

「子ども科学財団協力室」が設けられている。協力方針や科学実験、観察実験について議論を重ね、財団の要望に理学部全体として対応できる仕組みが整えられた。現在はそれぞれの専門分野を持った研究者が様々な連携事業に取り組んでいる。化石採集を指導する神谷教授は「古生物学は実用的な学問ではないが、地球にはどういう生物がいて、どのように進化してきたかを知ることで、例えば環境に関して深く考えるきっかけになるかもしれない。経験から何かを感じとってほしい」と語る。自身が古生物学の研究を行っているのも、さかのぼると子どものころ、化石採集を経験し、興味を持ったことが始まりだったといい、体験の重要性を語る言葉にも実感がこもる。

モーター作りに挑戦する池村君（右）と指導する中川さん。互いに学び合う場となった

教員目指す学生加わり 大学側にメリットも

8月も下旬になると、小学生は夏休みの宿題に追われる。財団の一室では少年と青年が机を囲み、カメラのフィルムケースを利用したモーターを手にとり、頭を抱えていた。尋ねたところ、少年が「モーターをつくる」というテーマで自由研究に取り組んでいるのだという。青年はそれを指導する大学生だった。

連携事業には、大学が専門的な知識、ノウハウを提供するにあたり、大学生が教える立場として参加するものがある。将来、教職を目指す大学生らに対する教育効果も期待でき、大学にとっても大きなメリットがある。財団での一コマは、「なぜなぜディベート・サロン」という連携事業で、大学生が小中学生の自由研究をサポートする。

このディベート・サロンは参加者の必要に応じて不定期で行われるAコースと、研究テーマを決めるところから始まり、定期的に行われるBコースに分かれている。平成18年度はAコースに10人、Bコースに17人の小学生が参加した。

Bコースを受講していた池村裕生君（小6）は、「友達に誘われて参加したけど、自由研究をやっていくうちに、あんまり好きではなかった理科が楽しくなってきた。毎回新しい発見があることが面白い」と熱心に手作りモーターに挑んでいた。大学生に教えてもらうことについても、「親しみやすくて、わかりやすい」と笑顔を見せる。

池村君をサポートしていた理学部4年の中川拓さんは、「子どもと接することが何よりも楽しい。また大学外の少し広い社会で新しい人間関係を築き、交流し、経験することで得られることは多い」と「教えてもらう場」である大学とは違った環境を喜ぶ。特に新たな人づきあいのなかで、自他ともに認めるほどコミュニケーション能力が向上しているという。

連携の輪をさらに広げ 伸ばせ子どもの好奇心

連携事業には改善すべき点がある反面、大きな可能性も秘めている。今後どのように発展させていくべきだろうか。

「子どもの理科離れが進んでいるといわれているが、元来子どもは好奇心が旺盛で、どんな物事にでも興味を抱きやすい。理科に興味が無いのは理科に触れる機会がないことが原因ではないか」と戸田さんは語る。

実際に、現代の子どもの周りはテレビやゲームばかりで、昔の子どものように自ら動いて得られる能動的な刺激が少ない。この現状を考えると、自然や科学、理科に触れる機会を子どもに与えていくことが、今後の理科教育の課題になるだろう。

そのためにも、財団と金沢大学の連携体制をより強化していくことが必要だ。現在は、財団と理学部や工学部の連携が中心だが、より幅広く子どもたちの理科への興味や関心を引かせるには、他学部との連携の強化も必要である。金沢大学が総合大学であるメリットを生かし、より幅広い支援体制とそれを整理統合するシステムを整えていくことが事業の発展に繋がる。

大きな可能性を秘めた連携事業。財団と大学の双方が互いに協調し、課題を解決しながら、子どもの無限大の可能性をいかに伸ばせるのか期待したい。

化石採集の一日

9:30／集合

〜

バスに乗って富山県まで

10:20／到着

〜

化石採集中!

たくさん採れた!

11:00／採集終了

〜

バスに乗って財団まで

12:00／昼食

〜

13:00／標本づくり

〜

きれいに泥を落として!

14:30／終了

～骨密度が上昇し、心も穏やかに～

草花がもたらす心身への好影響 鶴間キャンパス「園芸療法」最前線

暑さも和らぎ始めた昨年9月、金沢大学鶴間キャンパス（金沢市小立野）の中庭では、お年寄りたちの楽しそうな声が響いていた。「先週、茎を切って水につけておいたばかりなのに、もう小さな根が生えている」「あら、かわいい」。花の世話や観察、水栽培などの園芸にいそしむ参加者たち。実はこの活動、「園芸療法」の効果を科学的に検証する調査研究活動の一環なのだ。

学生編集委員　近藤珠実

古代エジプトから米国へ 国内では発展途上の療法

園芸療法は、植物の世話を通して病気の治療や予防につなげようとする試み。植物が持つ多様な機能を活用した補完・代替医療の一つとして位置づけられており、効果の解明が急がれる。全人口に占める高齢者の割合が20％を超えるなど超高齢化へと向かう社会を背景に、従来の「治療主体」から「病気を未然に防ぐ」医療の必要性がますます高くなっているなか、その期待に応える医療として注目を集めている。

園芸療法の起源は古代エジプトまでさかのぼる。第2次大戦後の米国では、傷痍（しょうい）軍人のリハビリと職業訓練を目的とした作業療法の一つとして用いられた。同国では1960年代から大学院レベルで「園芸療法士」の養成システムが確立している一方、日本は兵庫県立大学の「淡路景観園芸学校」が、公的機関としては唯一、園芸療法士の育成に取り組んでいるだけだ。

文部科学省の支援を受け 安川助教授が実証に着手

金沢大学で進められている園芸療法の研究は、文部科学省から科学研究費補助金を受けており、研究チームには大学院医学系研究科の安川緑助教授を中心に大学教員ら13人が参加する。3年計画で効果の科学的実証や園芸療法プログラムの開発、普及システムの確立などを目指し、1年目の平成18年度は、園芸療法の実践と調査データの収集、ボランティアの育成などを目標に掲げた。調査研究を兼ねた園芸療法を受けているのは、地域で自立して暮らす元気なお年寄り23人。ボランティア22人のサポートも受けながら、昨年7月22日から3カ月間、毎週土曜日に集まり、活動を続けた。

安川助教授は旭川医科大学講師だった平成9年、老人病院などでケアの質に関する調査をしたところ、高齢者が必ずしも豊かで生きがいのある生活を送っていないことを確認し、心を痛めたという。調査結果は、ガーデニングで癒された自らの体験と結びつき、「園芸を高齢者のケアに応用できないか」と考えるようになった。翌年には、園芸療法の世界的権威でバージニア州立工科大学のダイアン・レルフ博士のセミナーに参加するなどして、看護学をベースとした園芸療法の研究を始めた。

旭川医科大学時代に実施した調査では、花の寄せ植えを中心にした園芸プログラムで、参加者の骨の密度が有意に上昇するという身体的効果が確認されたほか、他人への思いやりが高まるなど精神的にも好影響を与えることがわかっている。

つぼみが開き広がる笑顔 キャンパスが癒し空間に

取材を始めた昨年9月。園芸療法の参加者は集合時間の1時間前から集まってきた。活動場所となっている保健学科のキャンパスの中庭では、ひまわりやサルビアなど色とりどりの花が陽光を浴びていた。隣接する学舎のラウンジには参加者が描いた絵が飾られており、落ち着きのあるBGMが流れる。大学内とは思えぬ癒しの空間で、活動前はこの中庭が雑草や落ち葉で荒れていたと聞けば、誰もが驚くだろう。

集合時間になり、ボランティアたちはアンケート用紙を手に「お体の調子はどうですか」と高齢者から聞き取りを始めた。聞き取りが終わると、血圧の測定や顔写真の撮影に移る。これらが研究の貴重な資料となっているのだ。

参加者はリラックス体操からスタート。その後、種まきをした二十日大根の観察、チンゲンサイの植え替え、押し花のレイアウトなど多彩なプログラムを楽しむ。

特に目を引いたのは、花の寄せ植えのときだ。屋台のような形をした木製の移動式花壇に、色とりどりの花が咲き乱れる。その名も「花Ya-tai」。旭川医科大学と北海道林産試験場、地元企業などが共同開発し、商品化もされている。安川助教授の園芸療法には欠かせないシンボルで、活動に合わせて旭川から取り寄せた。

活動中は参加者の笑顔が絶えない。多々見外与さん(80)は、「新聞記事を読んですぐに参加を決めました。毎回新しい発見があって楽しいです」と語る。水やり当番の日には必ず妻を同伴するという小杉利男さん(75)も「この活動を始めてから女房との会話が増えてね。今では2人で庭造りをするのが楽しみで仕方がないよ」と、妻にプレゼントする押し花の構図を慎重に決めていた。

活動前の聞き取り。聞き取った内容は研究の貴重な資料になる

二十日大根の生長具合を観察する参加者

参加者の変化を見逃さぬ ボランティアスタッフ

この活動には、ボランティアスタッフの存在が欠かせない。活動の準備や世話をしながら、参加者の変化を注意深く観察し、園芸療法の効果を見つけ出す役割を担っている。

ボランティアの1人で、公民館などで園芸の講師を務める花き店店主、倉下正彦さんは、「公民館で1回のみの講義よりも、このように継続した方が草花の生長過程が見られていいですね」と話す。「私自身、いつも高齢者の笑顔や花に癒されています」と語るのは、医学部4年の黒木美江さん。看護師を志す彼女にとって、ここでの体験は高齢者とのコミュニケーション方法を学ぶ学習の場にもなっている。

活動終了後は、安川助教授とボランティアによるスタッフミーティングが開かれていた。高齢者の健康状態や活動中の様子などを報告し合い、情報の共有化を図る。「以前に比べて、段取りが良くなっている」「(参加者の1人が)周りの人にも関心を持つようになった」「グループで協力する姿が見えた」など。スタッフは参加者とコミュニケーションをとりながら、微妙な心の変化をも見逃さず、観察していたのだ。

安川助教授が進める園芸療法活動のシンボル「花Ya-tai」

大学と地域の理想的連携 園芸療法で街の活性化も

活動は研究者と地域住民の協力によって成り立っている。大学側からすれば、園芸療法の基礎研究であり、療法の担い手を育てる人材養成の場でもある。また、取り組み自体が福祉活動であり、地域貢献に結びついている。一方、地域の人々にとっては、参加することで心身の健康を維持でき、研究活動への協力にもつながる。これこそ、大学と地域との理想的な連携活動ではないか。

さらに、園芸療法は病気予防をその目的としており、投薬に頼りがちな対症療法とも一線を画すため、「安全」「安心」の意味からも現代社会のニーズに即した将来性の高い療法といえるだろう。園芸療法を機軸としたビジネスモデルの確立、それによる地域の活性化も決して夢ではない。

園芸療法のプログラムが確立され、街のあちこちで園芸療法が行われている。そして、いつの間にか元気な街が増えている。そんな未来はいつ訪れるのか。「金沢を園芸療法の研究拠点にし、ここから世界に発信したい」と力強く夢を語る安川助教授を見ると、そう遠い話ではないように思えた。

花束作りで笑顔を見せる安川助教授(右)と参加者の多々見さん(中)

白山現地ルポ

登山者の健康を守る 雲の上の診療所

8月中旬のある日。私は標高2450メートルにある白山室堂センターを目指した。今日は登頂を目指すいつもの登山とは違う。白山で活動する「金沢大学白山診療班」を取材することが目的だ。登山開始から4時間、やっとの思いで室堂センターにたどり着いた。息を切らせながらロビーを見渡すと、右手奥の方に「診療所（Clinic）」の案内表示が目についた。

社会貢献室　山本秀樹

室堂平から山頂を望む。ここ白山には年間で約5万人の登山者が訪れる

半世紀の歴史を刻む山岳診療ボランティア

診療班は、白山登山者の健康と安全を守る山岳診療ボランティアだ。医学部出身の医師や現役医学生の有志によって構成され、毎年7月中旬から8月末までの夏山シーズンに「白山診療所」を開設し、診療活動を行っている。

診療所の歴史は半世紀以上前にさかのぼる。昭和28年（1953年）7月8日に診療班の第1班が入山して以来、350人以上の医師・学生が診療ボランティアを続けてきた。

取材に訪れたこの日は、田谷正樹医師（平成15年卒、泌尿器科医）と5人の医学生が迎えてくれた。診療所には2台のベッドのほかに、薬棚、洗面台、ストーブ、酸素ボンベ、聴診器などが置いてあった。酸素ボンベとはいかにも山岳診療所らしい。標高2450メートルの診療所では、夏でもストーブが欠かせないのだという。窓越しに外を眺めると、眼前に白山の雄大な頂がそびえていた。

日の出前から始まる診療所の1日

診療所の1日は、まだ日が昇らない暗がりの早朝から始まる。

午前4時に起床後、まずは応急手当セットを持って、山頂へパトロールに向かう。ご来光を拝むため、道を急ぐ登山者の事故に備えてのことだ。その間、診療所に残った班員は器具の消毒やバッテリーの充電、掃除などを行う。午前7時ごろからは室堂センターの厨房を手伝う。室堂スタッフと診療班員はいつも協力している。

日中は診療活動と登山道のパトロール。患者がいない時は、薬品の管理や診療所の整理をし、時間があれば医師から指導を受ける。午後9時に消灯するが、患者が来た時は24時間体制で対応する。

取材日の午前中の患者数はゼロ。午後からは7人が訪れたが、いずれも軽症で済んだ。お盆の休日と重なって室堂センターの宿泊者は約700人もいたが、大きな事故もなくその日は過ぎた。

学生が経験を積む場 山ならではの楽しさも

医学生は診療所のどういう部分に魅力を感じているのだろうか。1年生のときから毎年欠かさず入山して活動を続ける診療班サブリーダーの朝倉大貴さん（5年生）は、「医療現場を体験できるし、登山者との温かいふれあいが楽しい」と語る。

大学の授業では、患者と直接触れ合う機会は少ない。しかし、診療所では救護を手伝いながら間近で医師の処置を学べ、患者と接する機会を得られる。患者がいないときは直接教えを請うこともできる。朝倉さん以外の班員も、全員が「医療現場の体験が何より勉強になる」という。

魅力はまだある。山際歩さん（6年生）は、「患者からのお礼の

登山者でにぎわう室堂前

手紙が届いた時が何よりも嬉しい」と語る。他の班員も「自然の美しさに感動した」「登山者や室堂のスタッフとの出会いがある」という。もちろん、元気になって下山していく患者を見送ることに、大きなやりがいを見出していることは言うまでもない。

田谷医師も学生当時、ここで診療の現場と奉仕の精神を同時に学んだ。「私が学んだ分、次は学生たちが経験を積めるように、医師として協力したい」。学生時代に得た経験を後輩に伝えたいという思いもまた、半世紀以上にわたる診療所の歴史を支えている。

限られた設備と人材で最善の処置を施す

魅力ある診療所の活動にも、時には苦労が伴う。高山では同程度の病状や事故であっても、平地に比べ深刻な状態になりやすい。医療設備が市街地の病院とは比べものにならないうえに、設備の整った医療機関も近くにはない。一刻を争う状況でヘリコプターが出動することも年に数回はあるという。

医師の不在で、医学生だけで診療所を守らなければならないこともある。しかし、「診療」は医師にしかできない。医師の不在時には「休診」にしているが、そんなときでも患者が来たときは、医学生ができる限りの処置を施す。医学生が「一番の不安は、ドクターレス（医師不在）の夜なんです」と口を揃えるのも無理はない。医学生だけでは判断がつかない場合は、すぐにふもとの医師に連絡し、指示を受ける。班員は診療室に隣接した部屋で就寝し、深夜の急患にも備えている。

厳しい環境の中でも医療ボランティアとして最善を尽くしている診療班の活動について、白山室堂センター所長の小澤外志男さんは、「診療班がいることで安心感があります。治療によって結果的に命が助かった人が何人もいるでしょう」と、その存在の大きさを話した。

準備を整えることが診療班への協力に

皆さんはこの診療所の存在を知っていただろうか。ほとんどの登山者は診療所の世話になることなく下山していく。そのため、診療所そのものや、そこがボランティアによって運営されていることは、あまり知られていないのではないだろうか。

大学医学部などが運営する山岳診療所は全国に23カ所あり、金沢大学には白山診療班の他に立山の雷鳥沢と剱沢の2カ所で活動をする立山診療班があるという。

診療班の活動を知ったいま、その存在を〝保険〟にして安易な気持ちで登山するのではなく、これまで以上に準備を整えて臨みたい。そう思いを新たにして、私は下山の途についた。無理のない計画を立て、体調を整えて登山する。そして、健康な身体で下山することが、診療班や山に関わるスタッフへの何よりの協力に繋がるのだ。

取材日の班員。後列左から黒田かおりさん（2年）、林恭平さん（3年）、武原聡子さん（4年）、山際さん。前列は朝倉さん（左）と田谷医師

テーピングの指導にも熱が入る

万一の備えに医薬品の補充も欠かせない

ベッドは2床。窓からは山頂が見える

登山者の疾病で特に多い「類高山病」Q&A

Q：類高山病の症状は？

A：頭痛、悪心、寒気、全身倦怠感などです。ひどいときは呼吸困難や肺水腫などになる場合もあります。

Q：予防方法は？

A：最善の方法は、まず、体調を整えることです。睡眠不足はよくありません。類高山病は体質にもよりますが、「無理をしない」「ゆっくり歩く」「水分をこまめにとる」など基本的な体調管理をすれば、ある程度予防することができます。また、高地は昼と夜の気温差や低地との気温差などで体調を崩しやすくなるので、上着や雨具の持参も大切です。

Q：症状が出てしまったら？

A：下山することをお勧めします。類高山病は気圧の関係で空気中の酸素が少なくなったときに起こります。下山すれば症状は改善されます。

Topics

地元の要望を聞き出し きずなを深めた2時間

シナリオ無し。飛び出す意見は予測不能。市民と大学がざっくばらん語り合う。そんな意見交換会（タウン・ミーティング）が能登半島の中間に位置する羽咋市で開かれた。冷たい雨が降る12月1日の夜、会場となった市内の公共施設「コスモアイル羽咋」は120人を超える来場者が集まり、会場は熱気に包まれた。

社会貢献室　山本秀樹

「金沢大学タウン・ミーティングin羽咋」

意見交換する市民と大学関係者。本音を語り合い、互いの距離を縮めた。

大学の使命を語るうえで「地域貢献」が注目を集めている。大学間競争が激化し、「地域に根ざした大学でなければ生き残れない」と叫ばれるなか、「地域貢献」の重要性が認識されたからだ。平成14年、金沢大学は地域貢献推進室（現社会貢献室）を設置。子育て支援や里山自然学校など、本格的な地域貢献事業に取り組んだ。

羽咋市で開催された「タウン・ミーティング」も同年から続く事業の一つだ。「タウン・ミーティング」は、地域の要望を大学運営に生かすことや地域との組織的な連携を推進することを狙いとし、これまで石川県内5カ所で開催してきた。羽咋市は6カ所目となる。

当日は午後7時から、橋本哲哉副学長と橋中義憲羽咋市長のあいさつで幕を開けた。

観光から農業まで幅広く研究に発展する要望も

「千里浜海岸を浸食から守るにはどうすれば良いのか」と質問したのは、「羽咋ブランドの会」の冨山一夫さん。市内の観光スポットとして有名な千里浜海岸の砂浜が、年々、狭くなっているという。これに対して、海岸海洋工学の石田啓教授が、「人工の構造物を設置して、浸食を防がなければならない状況にまできている」と答えた。これまでは20年以上にわたって人工物を使わず、近くの港の砂を千里浜に戻す活動を続けてきた。それでも浸食は続き、このままでは砂浜がなくなる可能性も否定できない。

クワイ生産組合の松本政文さんは、「クワイの薬効を調査してほしい」と要望した。クワイは、正月のおせち料理にも使われる伝統野菜の一つで、市内では昭和55年ごろから栽培を始めた。現在は、高齢化が進み生産が厳しくなってきているが、同組合は薬効を見つけ、特産物としてその生産を守っていきたいと考えている。医学や薬学の教員は不在だったが、平野武嗣・産学官連携コーディネーターが、キノコの薬効などに詳しい薬学部の教授を紹介することを約束した。

このほかにも、「新しい特産品の開発に協力してほしい」、「妙成寺を国宝にするための助言を」などの意見や質問が相次いだ。大学の全教員が揃っていないため、即答できない質問もあり、それらは「宿題」として大学へ持ち帰ることにした。「水田の衛星写真を解析して米の品質を評価する技術を白菜に応用することはできないか」との要望は、具体的な共同研究に繋がろうとしている。

人々と直接向き合い親密な関係を構築

終了後は、「羽咋市の良さを再認識することができた」と笑みをこぼす人もいれば、「時間が足りなかった」とちょっぴり残念がる人もいた。確かに、2時間という短い時間では、深い意見交換ができたとは言えない。しかし、互いの顔を初めて知り、本音で話し合うことができたこと自体に大きな意味がある。

地域の要望を教育・研究活動に生かしたい大学と、大学の知的資源を活用して街の活性化に繋げたい地域とが連携することで、地域活性化への大きな力が生まれるに違いない。連携のきっかけを得たいま、これからの連携活動の行方に期待したい。

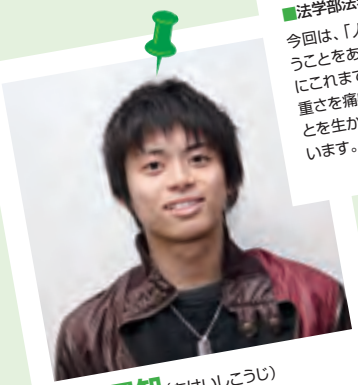
「金沢大学タウン・ミーティング」は、石川県内各地で実施します。開催の要望は、社会貢献室へ。

編集委員紹介

学生編集委員の熱い思いと努力で第5号も無事に発刊することができました。貴重な体験、出会い、苦労をともに味わったメンバーの声を聞いて下さい。

牧内幸子（まきうちさちこ）
■法学部法学科4年
今回は、「人に読んでもらう記事である」ということをあらためて意識しました。そして同時にこれまで以上に"書くこと"に対する責任の重さを痛感しました。編集委員として学んだことを生かし、これからも頑張っていきたいと思います。どうもありがとうございました。

神谷卓史（かみやたかし）
■工学部電気電子システム工学科3年
対談で最も感銘を受けた泉谷満寿裕市長の「珠洲が日本一や」という言葉からは、誰よりも珠洲のすばらしさを知っているからこそ言えた「市長の郷土愛」を強く感じました。3回目の編集委員では、新たに地域の良さを発見し、大変有意義な時間を過ごせたと思います。ありがとうございました。



明石晃知（あけいしこうじ）
■法学部法政学科3年
すべてが初めての挑戦。上手く取材をし、的確な文章を書くことは難しく、何度も壁にぶつかりましたが、取材先の方々、定江さん、山本さん、編集委員のメンバーの協力のもと、様々なことを学ぶことができました。今回の活動を通じて出会ったみなさんに本当に感謝したいと思います。

水越直哉（みずこしなおや）
■文学部人間学科4年
「地域とともに」に携わり3度目の発行を迎えることができました。取材・執筆など多くの過程を通し得ることができた、貴重な経験が胸に残ります。その甲斐あってか来年からの就職先も決定し、「地域とともに」に対する感謝は尽きません。関係者の皆様、今までありがとうございました。

近藤珠実（こんどうたまみ）
■文学部人間学科1年
初めて「地域とともに」に参加しました。予想以上に大学が地域に貢献しているということを目の当たりにし、また、参加者の皆さんが楽しみつつ学ぶ風景を見て「大学と社会」をあらためて考え直す機会ができました。少人数精鋭、ワキアイアイ自分を成長させられたと思います。

●編集後記●

「『地域とともに』まだできないの？」。少しずつ浸透してきたのか、皆さんからよく声をかけていただきます。声がかかるのは期待の表れ。素直にうれしい気持ちになります。でも、申し訳ない思いも。「まだできないの？」。遅れに遅れ、お約束のようになってしまったこの言葉を聞くたびに大反省しています。

地域連携コーディネーター
山本秀樹

平成19年3月発行
企画・編集・発行
金沢大学社会貢献室
印刷　能登印刷株式会社
協力　シナジー株式会社

【バックナンバーの紹介】
バックナンバーは、無料（送料は実費）でお配りしています。金沢大学社会貢献室へ直接取りにくるか、郵送をご希望の方は事前にお問い合わせ下さい。

金沢大学社会貢献室

地域のニーズに応える
「大学の総合窓口」
◆
大学の知と地域のニーズを繋ぐ
「コーディネーター」
◆
大学の社会貢献に関する
「情報発信拠点」

〒920-1192 金沢市角間町
TEL：076-264-5290
FAX：076-234-4045
E-mail：chiiki@ad.kanazawa-u.ac.jp
URL：http://cr.lib.kanazawa-u.ac.jp/

地域とともに
vol.5 平成19年3月発行
編集・発行 金沢大学社会貢献室 〒920-1192 石川県金沢市角間町 076-264-5290
印刷 能登印刷株式会社 ／ 協力 シナジー株式会社

金沢大学附属図書館

―地域に開かれた生涯学習活動の拠点―

附属図書館は本学の前身校である第四高等学校、金沢医科大学、金沢工業専門学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校、金沢医科大学附属薬学専門部の各図書館を統合継承し、昭和24年に設置されました。

【お問い合わせ】 中央図書館 〒920-1192 金沢市角間町（角間北キャンパス）
Tel:076-264-5211 Fax:076-264-5208

医学部分館 〒920-8640 金沢市宝町13-1（宝町キャンパス）
Tel:076-265-2141 Fax:076-234-4211

自然科学系図書館 〒920-1192 金沢市角間町（角間南キャンパス）
Tel:076-264-6554 Fax:076-264-6553

【開館時間】【休館日】各館で異なりますので、詳しくはホームページをご覧下さい。

http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/

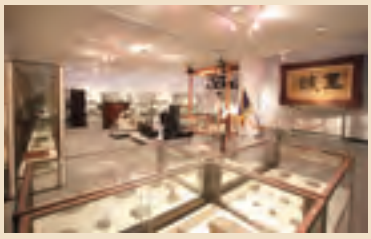
図書館はどなたでも利用することができます。また、北陸三県に在住、または石川県内に通勤・通学している方には資料の貸し出しも行っています。

金沢大学資料館

―「学ぶこと」の原点がここにある―

資料館は、金沢大学の歴史のなかで、研究・教育の結果生み出された様々な学術資料や大学自身を物語る史料を集め、整理・保存し、常時展覧会などを開催しています。「温故知新」―「学び」の歴史を刻む資料館で、何か新しい発見をしてみませんか?

九谷木米倣画大皿（暁烏陶磁器コレクション）



【開館時間】 12:00～16:00
【休 館 日】 土・日曜日、祝日、年末年始、展示替期間
【入 館 料】 無料
【お問い合わせ】 〒920-1192 金沢市角間町（金沢大学附属中央図書館内）
Tel:076-264-5215 Fax:076-234-4051
E-mail museum@ad.kanazawa-u.ac.jp
http://web.kanazawa-u.ac.jp/~shiryo/index.html